賀茂翁家集

六帖詠草

桂園一枝

全全全

大正四年二月二十日印刷
大正四年二月廿三日發行

有朋堂文庫
賀茂・六帖・桂園
（非賣品）

（岡山製本）

不許複製

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理

印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登

印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

緒言

賀茂翁家集は賀茂眞淵の歌文集にして、その歿後二十二年、卽ち寛政三年十一月門人平春海の編輯する所に係る。其例言には「すべて十卷」とあれども、今傳ふる所は五冊に過ぎず。第一第二の兩卷は歌集にして、第三第四第五の三卷は文集也。今本文庫に收むる所はその歌集の部のみにして、頁數の制限上遂に文集の部に及ぶ能はざりしは寔に遺憾とする所也。從つて原本所載の序文及び例言をそのまゝ覆刻し、名亦原本のまゝに「賀茂翁家集」と稱するの、甚だ當を失するものあるを見ざるにあらざれども、一はその歌集の部を原本のまゝに採錄して、一點一字の增減をも施さざりしと、一は讀者をして出來得る限り原本の面影を偲ばしめんとの老婆心と、この二個の理由によりて姑く此失當を敢てせり。切に讀者の寛恕を仰ぐ所也。但、其五卷の大部分を占めたる紀行文「東歸」「西歸」の二篇は、之を別に本文庫「日記紀行集」中に收めたれば、それによりて讀者はよく眞淵の散文の妙諦を窺ひ知るを得ん。眞淵の歌につきては世に既に定評の存する所、又家集卷頭の千蔭の序文

論じて餘蘊なきを以て、今敢て贅せず。

六帖詠草七卷は京都の歌人小澤蘆庵の歌集にして、其板本として世に出でたるは文化元年の事に屬し、門人小川萍流、前波默軒の周旋に成るといふ。別に萍流の編輯に係れる六帖詠草拾遺一卷あり、嘉永の始め上梓せりと雖も、今之に及ばず。蘆庵はもと尾張の國老竹腰氏に仕へて足輕たりしが、性甚だ豪放不羈、到底藩閥の下に其驥足を展す能はざるを觀じ、飄然去つて京に出で、歌を冷泉爲村に學びて遂に一家を爲せり。其歌調多く古今集に類し、其壘を磨する名作尠なからず。又、日夕紀氏の古今六帖を愛誦して措かざりきといふ。六帖詠草の名蓋し之に基づくか。當時澄月、慈延、蒿蹊と共に平安地下の四天王と稱せられ、而も其唱首に居り、本居宣長をして「京都に歌人蘆庵あり東に文人春海あり」と推賞せしむるに至れり。以て其名聲の當時に籍甚たるものありしを知るべし。

桂園一枝三卷は香川景樹の家集にして、その卷頭に載せたる門人平清樹の序文によりて、よく其集の由來を知るべし。別に桂園一枝拾遺二卷あり、今之に及ばず。景樹はもと因州

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

鳥取の人、始め歌を清水貞固に學びしが、後京に出でて香川景柄の門に入り、遂に其養子となりて香川の姓を冒したり。されど後に至りて歌學上の意見養父と相合はざるものあり、分れて別に一家を立てぬ。「我が家の庭の教はそむきても向ふ誠の敷島の道」とは、實に其當時の咏懐也、亦以て彼が所信の存する所を窺ふべし。彼は天才的歌人にして、その所懐を披瀝するや些の遲疑する所なく、苟も自己の見る所に反するものは、其先輩たると名家たるとに論なく、直ちに之を痛罵惡評して止まざりしかば、敵を作ること甚だ多かりしが、京都に於ける彼の勢力は又決して侮るべからざるものあり、一時門弟三千人の多きに及べりといふ。その歌亦天才的にして、語格の過誤、歌調の不整等間々これあるを免れずと雖も、自ら一種清新の氣に富みて生意潑剌たるもの尠なからず、殊に古來歌道の内に因習し來たれる固陋の見を排除し、斷々乎として別に一派を樹立したるの功に至りては、我歌學史の上に特筆大書すべきものと稱すべからん。

以上三種を收めて本文庫の一編となす。之に參看するに、「琴後集、うけらが花」の一編を

以てせば、德川時代に於ける一流歌人の述作は、ほゞ之を知悉せりといふに庶幾からん。

大正四年二月

校訂者　塚本哲三

目錄

賀茂翁家集

卷之一

春歌……九
夏歌……二六
秋歌……三四
冬歌……四三
戀歌……五五
哀傷歌……五七

卷之二

雜歌……六七
羇旅歌……七七
物名……八〇
賀歌……八〇
擬神樂催馬樂歌……九三
長歌……九九
旋頭歌……一二一

六帖詠草

春
春歌……一二五
夏
夏歌……一九六
秋
秋歌……二五七
冬
冬歌……三二三
戀
戀歌……三五二
雜上
雜歌……三七九

雜下
長歌……四六三
旋頭歌……四六四
物名……四六五
俳諧歌……四八六

桂園一枝
雪
春歌……五〇三
夏歌……五二二
秋歌……五三四
月
冬歌……五五六
戀歌……五七八
花
雜歌上……五八九

雜歌下……六一三
雜體……六二四
長歌……六二四
旋頭歌……六二七
俳諧歌……六二九

賀茂翁家集乃序

いそのかみふりにし世のことは、くもり夜のたときもしられざりしを、いなのめのあけゆくごとくなれるは、わづかに百とせあまりになむ有りける。しかはあれどなほもののけぢめおぼつかなかりしを、朝日子のとよさかのぼりて、八千の隈路のくまもおちず、明らかにしも成りにたるは、吾縣居の大人をはじめとすべし。その中にも、ならの葉の名におふ宮の古言やゝわきまへしらるゝことになりても、其心を得、そのことのはをひろひて、歌にも文にもまねびもちふることはあらざりしを、わがうし、ふることをやがて我物になして、よきをとりあしきをすてゝ、歌にも文にも作られしより、千歳のむかしのことぐさを今の世にまねび得るたぐひもいできにけり。千蔭いと若かりしより、うしにしたがひて、常のみありさま、のたまへりしことを、したしく見もし聞きもしつるに、うしは今の世の人とはことにして、うち見にはさかしきかたはおくれて、心おそ

きさまにおもはれしかど、たまさかにいひいで給へることに、しきしまの大和心をあらはし、ひと言としてみやびならざる事なかりき。筆とりてもの書きたまふを見るに、五百とせも經にけむ筆のあとの如くなむ有りける。こはあまたとし、よるひるとなく古ことをのみこゝろにしめて、いへるより調度にいたるまで、いにしへによりて、いさゝめにも後の世のことを耳にふれ、心にとめ給はざりしかば、おのづから古しへびとのこゝろに成りもてゆきて、其心よりいひ出でもし、物かきもし給ひしによりてこそ、しか有りけるならめ。かくいにしへにつとめたまひし中にも、歌をばことに心高くもてつけてものせられたれば、歌ひとつよみ出で給へるにも、深くかうがへ、あまたたびあぢはへて、によび出でられしなり。うたのさまは、はじめと中ごろとすゑと、三つのきずみありき。はじめのほどは、物學び給へる荷田の東滿宿禰の歌のさまにかよひて、はなやぎたよわきざまなりしを、中ごろよりみづからの一つの姿と成りて、みやびにしてしらべ高く、しかも雄々しきすぢをよみいだされ、よはひの末にいたりては、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いたく思ひあがりて、まうけずかざらず、たれも心のおよびがたきふしをのみ作られき。其はじめのほどなるも、あゐよりもあをしとか、すくねよりも立ちまさりてぞきこえし。をりにふれては、古事記のいとあがれる世のさまなる、またいにしへののりとごとになぞらへたる、あるは中つ世のさいばらのうたひ物をまねびたる、あるはものがたりぶみによりたるなどは、其世々の人のいひいだせるにことなることなくなん有りける。さるを一とせ火のわざはひにあひて、おほくうせぬるこそかなしむべき事のかぎりなりけれ。こゝに平の春海のをぢ、わらはより大人にしたがへりしによりて、うしのみまかられし後、家の集ども將くさ〳〵のちりぼへるふみらを、このをぢが家にをさめおけるをかきつめて、板にゑりなむとせしに、さはらふ事有りて、とし月經にけるを、更に思ひおこして、歌にふみに、くさ〳〵のとひこたへをさへにとりとゝのへて、十卷とはなしぬ。うしの遠つおやよりして、現身の世にませしほどの事は、江戸のみなみ荏原の郡品川の東海寺なる少林院のおくつきのかたはらの石碑にしるし

たれば、こゝにははぶけり。眞淵といへるみ名は、敷智の郡の名より思ひよりてつきたまへりとぞ。あがたゐとは、庭を田ゐのさまに作りて、賀茂氏のかばねにもよしあればとて、みづから家の名におほせられたるなりけり。今よりをち、古への學び世にひろごりなば、よゝ此うしをたふとみ、かつこの書をたゝへなむものぞとて、其ことわりをのぶるになむありける。

享和元年十月廿日　　橘　千　蔭

賀茂翁家集のおほよそ

一此翁の歌、はやき時にかきつめおかれたるがありしは、まだしきほどのわざなりとて、後にみづからやかれにけり。其中頃よりこなたのは、さらにしるしおかれにたるを、翁なくなりたまひて後、其家かぐつちのあらびにあへりし時にうせにければ、今はつたはらずなん。こゝに今書きつどへたるは、翁にもの學びたる人の、これかれしるしおけると、又あひしれりける人の家に、かずがずちり殘れるをもとめ得たるなり。さるはもれたるも多かるべし。又このかきつめたる中には、かのみづからやかれにけむ歌もありぬべけれど、今はた選みすつべきならねば、得るにまかせて載せつ。

一今かきつめたるには、はやき時の歌を後にのせ、又後なるがまへにいでたるもありぬべし。さるはちり〳〵なるをひろひつるが、くはしく序のしりがたければ、題の序にのみしたがへり。

一おなじ歌にて、かれとこれと詞のことなるあるはうたがはしきを、みだりにさだむべきならねば、一本とてかたへにしるせり。

一長歌は、おほくは眞名もてかゝれたるあり。されど今は皆平假名にあらためつ。眞名は後の人のよみあやまるべきものなればなり。さて題を眞名にかゝれたるをばあらためず。

一文もかきつめおかれたるがうせつるを、今は得るにまかせたれば、もれたるもおほかりなん。さて文にはやき時つくられしと、後にしるされしとあれば、その論じいはれたることの、かれとこれとあひそむけるたぐひもあり。見ん人うたがふことなかれ。

一祝祠碑文のたぐひは、眞名にてしるされたれど、みむ人のよみやすからんために、皆平假名に改めたり。

一書札はいとおほかりつらんを、今は往きかひせし人も多くうせにしかば、もとむべきよしなし。さればわづかにのこれるをあげつるなり。これはかりそ

めのわざにて、こゝろもせで筆にまかせられしものなめれば、ことさらに傳ふべきわざならねど、猶すてがたくてなん。

一やむごとなきおほせごとをうけたまはり、あるは人のうたがはしき事ども問へるふしなどに、考へてこたへられたる類をば、對問といひ、いさゝかづつかうがへおかれたるものゝはしゞなるをば、雜考とてあげたり。すべて十卷、名づけて賀茂翁の家集となむいふ。

寛政三とせのしもつき　　平春海記

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com